



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

4. 漲望編〈下〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai



アルファライト文庫



Main Characters **主な登場人物**



シャムロック・ハ・
エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



メイベル・
フォーン

亜神ロウリィとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



徳島 甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



伊丹 耀司
いたみ ようじ

陸上自衛隊一等陸尉。
江田島の要請を受け
再び特地へ赴く。



石原 莞吾
いしはら かんご

中華人民共和国・
人民解放軍総参謀部二部に
雇われた日本人。



オデット・ゼ・
ネウユラ

翼皇種の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田 島五郎
えだじま ごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。
セスラ メトセラ号の三美姫。三つ目のレノン種。
ミッチ メトセラ号の三美姫。黒真珠のような肌の子海棲種族。
リュリュ メトセラ号の三美姫。褐色の肌を持つ亜人種。
イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。
黎 紫萱 中華人民解放軍の二級軍士長。
プーレ プリメーラの世話係を任されたメイド。



シュラ・ノ・
アーチ

帆船アーチ号船長。
正義の海賊アーチ一族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・
ラナ・
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

トユマレン

クンドラン海

アトランティア・
ウルース

●メギド

アヴィオン海

碧海



05

石原は頭を抱えていた。

「どうしてこうなったんだろうなあ」

占い師からもらった珊瑚玉さんごだまを用いて貴族の宴会が行われている迎賓船げいひんせんに乗り込み、一か八かの勢いで女王陛下に自分を売り込むことに成功した。

しかもただ仕官するばかりでなく、宰相などという顯職けんしやくへの就任をもぎ取ったのだ。万々歳ばんばんざいの成果である。

だが望外の喜びにいささか警戒心が鈍にぶってしまった。それが大きなミスであると分かったのは、就任祝賀会で同僚たる尚書達から言葉を掛けられた時であった。

そもそも石原は、アトランティア・ウルースに食い込みたかった。なのに彼が宰相を務める国は、アヴィオン王国とかいう実態のない名ばかりの存在であった。

そう。権力なんて存在しない。にもかかわらず、尚書になれた連中は一体どうして喜



んでいたのかと思えば、それは名誉を手にすることが出来たからだ。

つまり、その程度の役職なのだ。

「道理で簡単に任命した訳だ」

プリメーラとかいう酔っ払い女王は、ごっこ遊びか何かの鬼でも決めるような心づもりで石原を指名したに違いない。だからこそ「宰相にしてください」「あら、いいわよ」という感じに話が進んだのだ。

しかもこの宰相という役目には、とんでもない地雷というか罠というか爆弾があった。アトランティア・ウルースは、ここしばらく外交的にかなり問題のある行動を繰り返した。

海賊を撃滅するためと称してアヴィオン七カ国から軍勢を集めておいて、いざ戦いが始まったらそれを後ろから斬り付けるような真似をしたのである。

卑怯極まりない悪辣な行爲である。

しかしアトランティアはその勢いで七カ国を制圧してしまう予定だった。たとえ悪行であつても上手くいくなら問題はなかったはずなのだ。

だがその作戦に参加しなかったティナエの軍艦オデットⅡ号によつて切り札が奪われた。

おかげでアトランティアはせっかくの軍事的な成功を逃したどころか、全世界から爪弾きにされる苦境に陥ってしまった。

そこでアヴィオン王国宰相の出番である。

計画では、宰相にはこういう役回りが振られているらしい。

『レディがそのような非道な方法に手を染めたのは、アヴィオン王国復活を求めてやまない宰相に言葉巧みに騙されたからであり、真に悪辣凶悪なのは亡命政権の宰相である。この男さえいなければ、今回のような事件は起きなかったであろう。すなわち全ての罪はアヴィオン亡命政府の宰相にある』

そういう方向性で、この問題は処理されることになっているのだ。

あたかも戦後のドイツ政府が、全ての悪行の責任を民主的な手続きによつて選ばれたはずのヒトラーとその一党に押しつけたようなものである。

だが、ナポレオン戦争後のフランスも、過去の悪行を全てボナパルトのせいにし、フランスはその犠牲者という立場で国体の維持を図ったのだから、論法自体は別に珍しくない。

「道理で宰相になりたいって奴がいなかった訳だ。どこかでおかしいと思うべきだったんだ」

石原は愚痴^{ぐち}つたが、今となつては全てが手遅れである。
黎^{レイ}がほくそ笑みながら言った。

「後悔は先に立たないと言ふからな。なんならもう諦めて逃げるか？」

全てを捨てて逃げてしまえば、命だけは助かるだろう。元より彼女は国に帰りたいという気持ちのほうが優勢らしく、石原が任務を諦めることは大賛成なのだ。

「いや、ちよつと待て。せつかく女王様と直^{じか}に話せる立場になったんだ。これを逃す手はないだろう？ まずはいろいろと献策してみることにするよ」

「ほほう。いよいよ縦横家^{じゅうおうか}蘇秦^{そしん}に習つてその舌を使おうという訳だな」

「舌を使う。舌を使うか……ふむ、閃いた。確か女王は後家^{ごけ}さんだったな……」

石原が邪悪そうに笑う。すると黎は両耳を押さえて頭ごなしに叫んだ。

「閃くな！ お前がどんな冗談を考えたか、少しも、まったく、絶対に聞きたくない！」

「なるほど、俺が何を考えたかお前にも分かつた訳だな。そういえば、お前も実は好き者^{ずか}だったもんな」

「だから！ 言うなつての!!」

「しよがないなあ、このあたりで勘弁してやるか」

「本当だな？」

「ああ、冗談はここまでだ。俺が考えた方法は、俺がどれだけ有能かを示し続けるってことだ。そうすれば、女王も俺をスケープゴートに使う計画を考え直すだろう」

「はあ、有能さを示す……か。寝言は寝て言え」

黎は揶揄^{やゆ}するように薄く笑った。

「黎。どうやらお前さんはとつとと国に帰りたいみたいだな。だがな、逃げるのはやれることを全部試してからでも遅くないんだよ」

石原は自分の弁舌能力に全てを託すと告げたのだった。

とにもかくにも石原はアヴィオン王国宰相となった。

名前だけとはいえ、これでアトランティア・ウルースの王城に出入り自由の立場になったのだ。それを活かさない手はない。そこでまずは、アトランティアのハーラム——つまり女王のレディに就任の挨拶という名目で面会を求めた。

「お前がイシハ・ラ・カンゴーですか？」

名前の区切り方がちよつと違うなあと思つたが、異世界であまり細かいことに拘^{こだわ}つても意味がないので、石原は恭しく頭を垂れながら「左様でございます」と応えた。

「聞けば、そなたは自らプリムに売り込んだそうですね」

「はい」

「つまり、覚悟は出来ているということですね？」

この『覚悟』が何を意味しているかは言うまでもないだろう。悪辣な宰相として全ての責任を負って死んでいく腹づもりのことだ。

「女王陛下のご期待以上の働きをする覚悟ならばございます……」

石原は含みのある表現を使って、ただの捨て駒にはならないとアピールした。すると女王はすぐに反応した。

「そのようなことはまったく必要ありません。お前はしかるべき時に、しかるべき方法で死ぬべきなのです。それまでは位人臣を極めた喜びを味わっていなさい。未練や思い残しがないようにするのです。いいですね？」

「陛下ならばそうおっしゃってくださいださると思っておりました。しかし私にとっては、まさに仕事こそが味わうべき『喜び』なのでございます」

「言っていることが分からないのですか？ 私は来るべきその日まで、遊び呆けていなさいと命じているのです」

「陛下も、どうぞお耳をお貸しください。私にとっては仕事こそが遊びなのです」
レディは虚を衝かれたように目を瞬かせた。

「……………仕事遊び？」

「そうでございます」

「お前、随分と変わっているんですね？ 少なくともそういう者が近くにいたことはありません」

「そうですね？ 男の全員がそうだとはいませんが、その手の人間は案外あちこちに転がっているものなんです。様々な事柄に働きかけ、思い通りになっていく様を見ていくのは私にとっては無上の喜びです。何かの問題を解決して人々から賞賛されるのは愉悦この上ありません」

レディは肩を竦めた。

「何もかもが思い通りになるのならそうですね？」

「はい。ですので女王陛下、どうぞ私めの喜びのためにぜひ仕事を賜りたく存じます」

「はあ……よいでしょう。遊んで暮らせと言ったのは確かに私なのです。で、何をさせればよいのです？」

「まずは、我が主君プリメーラ様、そしてその偉大なる後見人たるレディ陛下の御為になる献策を申し上げたく思います。実は私、宰相に任じられてから、あちこちにこのアトランティア・ウルースの置かれている状況を尋ねて歩きました」

「それで、何か分かりましたか？」

「はい。アトランティアの置かれている状況は、じり貧とでも申しましょうか……もう後のない、最悪の一語に尽きるかと」

「……………不愉快ですね」

「はい。実に不愉快な状況です」

「不愉快なのは貴方の物言いです！」

「女王陛下、どうぞ目を背けることなく現実をご覧ください」

「お前、私を不愉快にさせて何をしたいのです？ 死にたいのですか？」
すると石原は不敵に笑った。

「私が死を恐れるとお思いですか？」

これにはレディも返す言葉がなかった。

アヴィオンの宰相は刑死する予定である。従って、石原の置かれている状況は今死ぬか、あとで死ぬかでしかないのだ。

従ってこの男には死などまったく脅し文句にならないのだ。それどころか、レディは石原を軽々に殺せない。全ての罪を着せるには、効果的なタイミングで殺す必要があるからだ。つまり現時点では、誰も殺せない最強の存在なのだ。

そのことをレディも今更のように理解した。

「この状況を少しでもよくする方策を練りました。それをお聞きいただきたいのです」

「一体どうすると言うのです？」

「七カ国の全てに、内々で使者を送りましょう。そしてありとあらゆる手段を尽くしてこちら側に引き込むのです」

「どうやって？」

「例えばシーラーフ侯国では、跡継ぎ問題で侯家内が暗闘の真つ最中とか。どの跡継ぎ候補が前シーラーフ侯爵公子の仇を取ったかで後継者が決まりそうな状況です。使者にこう囁かせる手がございます。『陰謀の中心人物、悪徳宰相イシハの首を獲る機会を与えましょう。その代わり、アトランティアの味方になってくれませんか』と」

この言葉にレディは目を瞬かせた。確かに効果はあると思っただけだったのだ。

「し、しかし、それによって攻め込んでくるのが七カ国から六カ国になったくらいでは意味がありません」

「いいえ。これで相手方に不信感を広げることが出来ます。相手が明確に拒絶しなければ、シーラーフは裏でアトランティアと繋がっていると触れ回れます。もちろん他の国にも似たような裏工作をどんどん仕掛けて参りましょう。そうすれば、彼らはやがて互

いに罵り合うようになる。お前が、いやそっちこそが、アトランティアと裏協定を結んでいる、と言つて。こう申し上げては失礼ですが、アヴィオン七カ国は陛下に対する恨みだけでまとまっているような烏合の衆。ちよつと猜疑心の種を蒔いてやれば、共闘関係などあつという間に瓦解してしまうでしょう」

レディはいつの間にか石原の流暢な物言いに吞まれていた。

「そ、それでどうなるのですか？」

「後は元からの計画通りなされるのがよいでしょう。海賊活動が続けて、敵方の国々をじわりじわりと弱めていくのです。まずは一国、例えばティナエを併呑するのはいかがでしょうか？」

「……なるほど。お前の言う通りかもしれませんね。ですが、最近では海賊活動が難しくなっています。何しろニホンとかいうお節介な国が軍艦を派遣してきているのですから」

レディは、石原の論説に穴を見つけたことが嬉しうであつた。その状況は本来自分にとつては不快なはずだが、石原の言葉を素直に認めてしまうことのほうが業腹に感じられるからであつた。

しかし石原はそんな反論すら想定していたかのように笑みを浮かべたままだつた。

「私めに名案がございます」

「どのような？」

「この策を用いてくださいますと、日本の軍艦が、アトランティア・ウルースの旗を掲げた船に手出し出来なくなります」

「なんですって？ そんな方法があるのですか？」

レディは思いつきり身を乗り出した。

「もちろんです。何しろ私、あの国のことはよく存じておりますので」

「ど、どうすればよいのですか？」

「お知りになりたいですか？」

石原のもつたいつけた言葉に、レディは苛立ちを露わにした。

「いいから早く言いなさい」

「では、申し上げます。あの国がアトランティア・ウルースの軍船を海賊だとして取り締まるのは何故か。それはアトランティアを国家として認めていないからです」

「アトランティア・ウルースは国です。私の治める国家です」

「ですが、アルヌスにある『門』の向こう側では、国家として認められるのに必要な要件がございます。それは、領土と国民と政府、そして外交能力の四つから成り立ってお

ります」

「その四つとも、我が国にはあります」

「いいえ、重要なものが欠けています。だからこそ、日本はアトランティア・ウルースを海賊の集団と見なすのです。そしてその軍事行動を海賊行為と見なして邪魔することが出るのです」

「どうすればよいのです？ 何を補えばよいのです？」

「領土です。どこでもよいので、領土を是非手にお入れください」

「領土。海では駄目なのですか？」

「あの世界の者達は、何もかも陸を基準に考えます。領海とは、領土の付属物なのです。国家として認めさせるには領土が絶対的に不可欠です」

「では、どこか適当に無人の岩礁でも占領して、領土だと宣言しますか？」

「はい。それで結構です。そうなさるべきです」

「そ、そんなことでいいのですか？」

石原は、国際法で島嶼と認められるにはある程度の基準があったことを思い返した。

「はい。もちろん、人が住めるような広さがあるほうがよいのですけれど。そして領土を得たら、そのことを思いっきり宣伝するのです。アルヌスにある『門』の向こう側に

も聞こえるように。そうすれば、アトランティア・ウルースは独立国となる。海賊行為も、それは国家としての軍事作戦の一環だと主張できます」

「でも、どうしてそんなことくらいで二ホンは手を出せなくなるのですか？」

「それがあの国の法律だからです。あの国は、他国に戦争は仕掛けないと自らを縛る法律を持っているのです」

「しかし、帝国との戦いの際には攻め込んできたではありませんか？」

「仕掛けられた戦争ならば、身を守るためなので許されます。また、当時帝国とは国交がございませんでした。従って、国交が結ばれるまでは『外敵』ではありません。この世界自体が、『銀座にある未発見の土地の一部』という扱いでした」

「そ、そうですか……」

「いかがでしょうか？ 私の献策は、ご満足いただけましたか？」

レディは納得したのかゆったりと椅子に腰掛け直した。

「ええ、とてもよい示唆となりました。早速参考にさせていただきます」

「女王陛下のお役に立てたのであれば、望外の幸せです。また何か陛下を悩ませることがございましたらご諮問ください。私のこの頭脳でたちどころに解決策を捻り出してみせましょう」

「お前のような知恵者が、アヴィオンの宰相とはもったいないですね」

石原は声を潜めるとまるで内緒話のように囁いた。

「そうお思いくださったら、陛下のお手元で使っていただいてもよいのですよ？」
するとレディも声を潜めた。

「何かあつたらまた尋ねてもよいのですか？」

「はい」

謁見の間での会話だ。いくら声を潜めていても、周囲の大臣や侍従達の耳に入っている。しかし内緒話を気取ったことで、レディと石原が共謀関係を結んだという錯覚を引き起こさせた。

「ですが、お前はプリムの宰相。取り上げてしまう訳にもいきません。今後ともプリムのため、そして私のために働いてくださいね」

だがそれでもレディは、石原にアトランティア・ウルースに仕えるとは言わなかった。まあ石原も、最初の一回で上手いくとは考えていない。

「かしこまりました」

石原は恭しく、余裕綽々の笑顔で頭を垂れたのだった。

「黎……」

女王との謁見を終えた石原は、王城船の控えの間で待っていた黎に告げた。

「なんだ？」

「お前、銀座側世界と連絡を取る方法を持ってないか？」

「既にこのアトランティア内の拠点は全て失われていて連絡方法がない。私かお前のどちらかが戻るしかないぞ」

「ならばその時はお前が戻れ。アルヌスなら、まだ向こうとの連絡手段はあるはずだ。

そしてこっちで起きていることを伝えるんだ」

「何を？」

「アトランティア・ウルースが領土を得て国家になるってことだ。領土を得たら、そのことを銀座側の世界で思いつき報道させてくれ。アトランティアはもう海賊として扱えないぞってな」

石原の言葉を聞いて黎はしばし考えた。

このまま銀座側世界に帰るのは各かではない。しかし石原をここに一人だけ残していることには、果てしない不安を感じていた。この男には、中国共産党に忠誠を誓う理由がない。ここに一人残していったら自分の行動原理に従って好き勝手やるに違いないの

だ。だから監視をする必要があった。

「ああ、そんなことが目的なら別に戻るまでもないぞ」

「どういうことだ？」

「アルヌスにある、日本の通信社に手紙を送ればいい」

「通信社？ 新聞屋のことか？」

「そう。奴らはこちらの情報に餓^うえているからな、ちよつと囁いてやるだけでいい。任せておけ。そちらは私のほうでやってやる」

黎はそう言うのと、羊皮紙を持ってくるよう王城のメイドに命じたのである。

こうして石原は、良くも悪くもレディの記憶にその存在を印象付けることに成功した。しかし同時に困ったことが起きていた。彼自身には、アトランティア・ウルースでの活動資金がまったくなかったのである。

何しろアヴィオン王国には税収がない。従って、亡命政府には活動費どころか閣僚達に支払う給料だってないのだ。プリメーラすら、レディに養われている状況だ。

もちろんそんなことは、尚書になりたがっていた連中はとつくの昔に承知していた。つまり彼らは手弁当のボランティアで尚書職を引き受けたのである。

名誉ばかりで権力なんて欠片もない地位に就きたがるのは、金銭など余るほどあるという人間ばかりなのだ。

問題は、石原には彼らのような財力すらないことだった。

黎が秘密拠点から持ち出した金貨や銀貨は、この世界で普通に暮らすならば優に一年は過ごすことが出来る。しかし石原の紛^{まぎ}れ込んだ世界は王城であり、交際の相手は貴族や富豪だ。彼らとの付き合いに必要な経費は、単位からして違う。住む場所にしても、日々の食事にしても、衣装にしても、通常の十倍とか二十倍、あるいは百倍のコストがかかってしまう。

これではこの世界を混乱に導くという任務の遂行はもちろん、アトランティア・ウルースへの転職活動すらも難しい。

このままではレディ女王^{ヘラ}の計画通り、全ての罪を背負って刑死することになってしまふ。

もちろん素直に死んでいくつもりはないが、逃亡は任務を放棄することにもなるので最後の手段なのだ。

「困ったな……」

頭を悩ませた石原に黎が告げた。

「そんなに金策に困っているなら、売官でもしたらどうだ？」

「？」

「地位を金で売るんだよ。お前は宰相なんだろ？」

官位や役職を金で売る。

それは現代日本人の石原にはまったくない発想だった。しかし黎の住まう国では、つい最近までごく当たり前に行われていたという。

幸いにも、プリメーラの宮廷には尚書——つまり大臣しかいない。その下の官職はまるっきり空席なのだ。

そこで石原は、自分が宰相という宮廷を差配する立場であることを利用して、副尚書やら官房長やら次官やらになりたい人間を密かに集めた。そしてその代価を要求したのである。

「プリメーラ様。この者達が、財務尚書の下で働くことになる副尚書候補者でございます。こちらは式部卿、国璽尚書の下で働くことになります」

石原は富豪達を次々とプリメーラに紹介した。

「そうですか。皆の者、どうぞよろしく」

「この者は、アヴィオン海軍の連合艦隊司令長官候補者でございます」

「どうぞご活躍をお願いしますね」

石原から紹介を受けたプリメーラは面白そうに頷く。そして求められるまま、迷った戸惑ったりすることなく、片っ端から任命していったのである。

彼女は、あくまでもこれを宮廷ごっこ的一种と思っているのだろう。

だが石原はこうやって集めた資金を利用し、王城船の近くに自らの住まいとなる船を確保。そこでアトランティア・ウルース内のコネクションを広げるための様々な宴や催しを開いていった。

もちろん、招待を受けた場合は必ず出席した。

そこに集まっているのは、名ばかりの官位でもよいというような連中ではない。それでも数が揃えば一定の力にはなる。そんな彼らを集め、ウルース内部に派閥とでも称すべき人脈を築きあげていこうと企図したのである。

ウルースで一、二を争う妓楼船メトセラ号で開かれた宴会も、そんな石原に取り入って官位を授けてもらいたいという豪商の招待に応じたものだったのだ。

06

「よくぞおいでくださいました」

「お客様、いらっしやいませ」

石原達が到着すると楼主を先頭に、メトセラ号の娼婦達が勢揃いして迎えてくれた。

「おおっ、すげえ！ 美人揃いだな」

見渡せば容姿に優れた様々な種族の美女達が揃っている。

この選り取り見取りの中から好きな子を選んでよいというのだから、石原でなくとも鼻の下が伸びるところだろう。しかし宴の主催者である老人は満面の笑みで石原の背中を軽く叩いた。

「さあさあ、イシハ様。こんなところで満足してはいけませんぞ。何しろこの者達よりも更に美しい三美姫が待っておりますからなあ」

「えっ、何!? もっと綺麗な娘がいるっていうの?」

「はい、もちろんですよ。イシハ様」

「だから、俺は石原だって」

「そうでした。イシハ・ラ・カンゴー様。ささ、こちらへ」

石原は主催者の老人の案内で早速妓楼の奥へと進んだ。

さすがメトセラ号は妓楼船である。

船内の狭さを感じさせない豪華な造りで、上甲板へと上がっていく梯子段も陸の家に
ある階段のようになだらかだ。

「おいでなさいまし」

そうして上がったといった船尾楼の広間に、三美姫が待ち構えていた。そして、それぞ
れの出身民族の習慣に基づいた最上の礼儀で、石原を歓迎する意思を表明する。

「うおっ、これは！」

美人、美麗——彼女達に冠すべき言葉を手当たり次第思い出しながら、全体的な容姿
を下から舐めるように見ていく。

そして胸部のあたりに目玉が釘付けになった。

彼女達のその部位は、衣装なんかではとても隠しきれないほど自己主張に優れていた
のだ。しかも前へというよりツンと斜め上を向いている。

「や、やべえ……最高級の水蜜桃が六個」

思わず手をワキワキとさせた。

黎が九十点ならこの三人は間違ひなく百点だろう。いや百二十点を付けてもいい。

石原はその内の一人、銀髪の三つ目美女に注目した。

「あれ？ あんた、占い師のところにいる……」

「わたくしには妹がおります。きつとその者のことでしょう。元気にしてましたか？」

「ああ。彼女は妹さんなんだ。もちろん元気だったさ」

「ささ、こちらへどうぞ」

彼女達是一流の娼姫である。普通なら嫌悪感を抱いても当然な石原のあからさまな視線にもまったく動ずることなく、彼を主賓席へと誘ったのである。

「さあさあ、どうぞおかけください」

日本にある、女性が隣でお酌しやくをしてくれるようなお店では、女性は客全てに対応するため必要に応じてくると席を移動する。特に石原はそんな店でも女性から放置されることが多く、あまり良い思いをしたことがない。とはいえ今回は主賓であるから当然、三美姫の内一人くらいは石原の傍らに常駐してくれるはずであった。いや、常駐してくれたらいいなあと期待していた。さすがに他の二人は他の客に付いてしまっただろうなど

小市民感覚の石原は諦めていたのである。

ところが石原の予想に反し、紅色の入れ墨と褐色の肌が艶あでやかなリュリュと、黒真珠色の肌を持つミッチは、石原を挟むように腰を下ろしたのである。

「え、おつ……ふ、二人とも？ いいの？」

「もちろんですとも。イシハ様が本日の主賓なのですから」

おかげで石原の視線は、リュリュとミッチに引つ張られて左右眼振さゆうがんしんのようになってしまった。

「リュリュだ」

「ミッチでありんす」

「うわっ。二人とも、すんげえ美人」

そんな石原の感想を聞いて主催者の豪商が笑った。

「こちらのメトセラ号は、ウルース一番の伝統と格式を誇る妓楼きろうでしてな、三美姫ありと世間に知られております。その三人がリュリュ、ミッチ、そしてこちらのセスラです。それがしはこのセスラ目当てに長いこと通いまして、最近ようやく馴染みとなりました」

三つ目美女はそう紹介する豪商の傍らに腰を下ろした。

「な、なるほど、普段から鼻^{ひいき}肩^{かた}しているお店なら、ボられたりする心配もないですもんね」

石原は庶民的感觉丸出しの発言をして豪商にまた笑われてしまう。

三美姫の内一人と遊ぶだけで庶民一年分の年収が吹^ふ飛^とぶことを、この男は知らないのだろうと思われたのだ。

「宰相閣下はこういう店では遊^{あそ}ばれないので？」

「ええ、黎の奴がうるさいので」

「しつかり者の妻を持ちますと、何かと苦^{くる}労^{らう}いたしますなあ」

「ええ、まあ……」

石原は口を濁す。

別に黎を妻として紹介した訳ではない。しかし一緒に奥で迎賓船に連れ込んだせいで周囲からはそのように思われていた。

「私の妻もしつかり者というか、吝^{りん}嗇^{しやく}でしてな……」

「主様、このような場で奥様のことを口^{くち}にされるのは無^ぶ粋^{すい}ですわ」
するとセスラがむくれたように唇^{くちばし}を尖^{とが}らせた。

「そうだったな。すまないすまない。機嫌^{きげん}を直^{ただ}しておくれ」



立ち読みサンプル
はここまで

豪商の老人は大慌てでセスラの機嫌をとる。

このような場でさらっと見せる細やかな嫉妬が、自分を可愛く見せ、男心をよく惹きつけるのだと彼女は知っているのだ。

「ささ、宰相様。どうぞ……」

セスラが石原の前に進み出て杯を差し出す。すると右からリュリュが石原に杯を持たせてくれた。

「お、おお、ありがとう」

何もかも美女が細やかに気遣ってくれる。その快適さに戸惑っている間に、石原の杯にセスラが酒を満たしていった。

続いて他の客の杯にも、セスラが酒を注いでいく。

みんな豪商と同じように、金はあるので名譽が欲しいという年寄り達ばかりだ。

そんな連中に対しても、一人に一人ずつ三美姫とまではいかずとも美しさでは引けを取らない娼姫達が傍らに付いている。だが最初の一杯だけは、主催者が晶屑にする娼姫——つまり豪商が熱心に通ったセスラが注ぐというのがこの手の祝宴での習わらしい。

みんなに酒が行き渡つたのを見ると豪商の老人が告げる。

「では、プリメーラ陛下。そして宰相閣下に乾杯！」

するとすかさず石原が立ち上がった。

「そしてアヴィオン王国の新たな『紋章長官』閣下に！」

石原のその言葉で、豪商の老人は自分がどのような官位を手に入れたのかを初めて知った。

彼はこの名譽を手に入れるためだけに、金貨の詰まった箱を何個も石原の船に運ばせたのだ。その甲斐があつたというものであろう。

「おおっ！」

「素晴らしい。紋章長官閣下！」

「おめでとう、紋章長官！」

相伴する形で集まってきた、豪商の友人達も祝福した。

もちろんこんな形での叙任だ。純粹な意味での祝福などありはしない。

あるいはもしかしたらどこかには存在しているかもしれないが、大部分が嫉妬を追従の笑顔で覆い隠した、飾られた言葉でしかないのだ。

しかしそれでも豪商は満足そうだった。内実がどうあれ、表向き美しければそれでよしという達観は、年寄りの特権なのかもしれない。